

中国社会科学学会 2010年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel: 03-5841-3746, Fax: 03-5841-3744, E-mail: shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（資料代）1000円 非会員の来聴歓迎

2010年7月10日（土） 自由論題報告

セッション1 知の誕生プロセスへの視線 14:30～17:20 一番大教室

司会 林 文孝（立教大学）

修母致子説について——漢朝正統論から生まれた経典解釈 ……平澤 歩（東京大学）

コメンテーター：渡邊 義浩（大東文化大学）

宋明知識人による風水の「発見」について——朱熹を焦点とする検討 ……水口 拓寿（東京大学）

コメンテーター：村松 伸（総合地球環境学研究所／東京大学）

中国東北地区図書館蔵の満州文字対音表記資料にみられる版本異動についての一考察

……………大野 広之（慶應義塾大学）

コメンテーター：寺村 政男（大東文化大学）

セッション2 清朝期官僚にとっての「西洋」 15:30～17:20 二番大教室

司会：茂木 敏夫（東京女子大学）

咸豊期郭嵩燾の軍事費対策——士大夫意識、西洋体験との関連から見た……小野 泰教（東京大学）

コメンテーター：佐々木 揚（佐賀大学）

「夷務」をつかさどるということ——18世紀中葉の広州における貿易制度の構築と貢品制度との関わりについて ……藤原 敬士（東京大学）

コメンテーター：山本 英史（慶應義塾大学）

会員総会 17:30～18:00

2010年7月11日（日）

シンポジウム 中国史上におけるイデオロギーの役割

セッション1 大一統のイデオロギーとしての儒教 10:00～12:00

1 「古典中国」の形成と王莽 ……渡邊 義浩（大東文化大学）

2 再編された古典——宋代儒教の理念 ……小島 毅（東京大学）

懇親昼食会 12:00～13:00 2番大教室 [会費1,000円]

セッション2 近現代の革命イデオロギーと大衆 13:00～15:30

3 中国革命のイデオロギーは人間の安全保障を準備したのか？

……………緒形 康（神戸大学）

4 革命イデオロギーの遠い水源——清末の「救劫」思想をめぐって——

……………山田 賢（千葉大学）

5 毛沢東時代における大衆動員と革命イデオロギー ……金野 純（学習院女子大学）

総合司会：茂木 敏夫（東京女子大学）

総括討論 15:30～16:30

◇修母致子説について

——漢朝正統論から生まれた經典解釈

平澤 歩

[報告要旨]前漢末期から後漢中期にかけては、儒教経学に対して、政治・社会的に真実（であるべき事柄）を導き出すことが強く求められた時代であった。真実（であるべき事柄）を導き出せるのがその学問の正しさの証明・宣伝であり、その成否には、学派の浮沈が掛かっていた。このような時代背景の元で、左伝学者が『春秋左氏伝』を顕彰するために編み出したのが、「修母致子（五行で母の行に当たる徳を修めると、子の行に当たる徴が現れる）」という説であった。これは、『左氏伝』の明文を根拠にして、漢王朝の正統性という、当時において最も重要視されていた真実（であるべき事柄）の一つを導き出すための論法だった。そして、最初はこのように現実社会の具体的な要請によって生まれた修母致子説だったが、その後、漢朝正統論に止まらず、五行に関する一般的原理として展開され、後漢末期には、理論として体系的に整備された経説に発展した。

[報告者紹介]平澤歩（ひらさわ・あゆむ）氏は1984年生。専攻は漢代五行思想。東京大学文学部卒。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。

◇宋明知識人による風水の「発見」について

——朱熹を焦点とする検討

水口 拓寿

[報告要旨]本発表では、朱熹を初めとする宋明の儒教知識人たちが、風水思想に一定程度の肯定を示し、自らの考える「正しい文化」に取り込もうとした動きに注目して、その論理の系譜を「正しい喪礼」と「正しい宇宙観」の2局面から検討する。『儀礼』士喪礼や『礼記』雜記篇が墓地選定のための占術に指定していたものは、古に行われていたとされる卜筮（亀卜と易筮）である。それらは明らかに風水とは別個の占術だが、南宋の朱熹や明の丘濬らは、卜筮の本来の技法がもはや伝存しないと見なし、「俗」の占術である風水がそれに代わることを認めた。しかし宋明の儒教知識人たちは、風水思想を「正しい文化」の一翼たり得るものとして、当時あるがままの姿において受容したのではない。彼らはいくまで、その体系の一部分を選別的に「発見」して、道学の語る宇宙観の中に消化吸收しようとしたのであり、そうした取捨選択の作業は、既に北宋の張載や程頤から始まっていた。

[報告者紹介]水口拓寿（みなくち・たくじゅ）氏は1973年生。専攻は中国思想文化学・文化人類学。東京大学博士（文学）。東京大学大学院人文社会系研究科助教。主要論著『風水思想と儒教知識人：言説史の観点から』（東京大学大学院人文社会系研究科博士論文ライブラリー、2009年）、『風水思想を儒学する』（風響社、2007年）、「論中華文化復興運動時期的「祭孔禮樂之改進」」（『「世界的孔子：孔廟與祀典」国際學術研討會論文集』所収、2010年）。

◇中国東北地区図書館蔵の満州文字対音表記資料にみられる
版本異動についての一考察

大野 広之

[報告要旨]本報告では、昨年度慶應義塾大学にて発表した拙稿「『御製満洲蒙古漢字三合切音清文鑑』に見られる満州文字対音表記についての一考察 — 牲畜部・鱗甲部・蟲部を中心として—」（『藝文研究』2009. 12）において紙幅の関係から触れられなかった部分、殊に東北地区図書館訪問によって得られた版本異同の問題を取り上げることとし、若干の考察について述べていきたい。清文鑑研究については古くは今西（1966）、上原（1965）、（1966）、落合（1985）、そして中嶋幹起による『清代満洲語中国語辞典』に結実するまで、アルタイシストによる興味は尽きないところである。今次報告においては、先達の諸先生方がものされた論点に依拠して実地踏査を重ねたところに特徴があると思われるが、筆者の興味・関心は満文典籍の語学的側面、就中、満洲文字対音表記による漢語の音体系を明らかにするところにある。今後は、仏教典籍についても考察領域として研究を深めていく所存である。

[報告者紹介]大野広之（おおの・ひろゆき）氏は1968年生。中国語学専攻。慶應義塾に大学院後期博士課程まで学ぶ傍ら、大妻中野中高教諭、慶應義塾普通部・慶應義塾高等学校講師など中等教育にも携わる。主要論文・発表として「苗語古音構擬問題」（王輔世教授との共同発表、AA研「辞典編纂及び言語文化接触に関する研究」合同プロジェクト、1994年）、「『御製満洲蒙古漢字三合切音清文鑑』に見られる満洲文字対音表記についての一考察」（『藝文研究』2009年）などがある。

◇ 咸豊期郭嵩燾の軍事費対策

——士大夫意識、西洋体験との関連から見た

小野 泰教

[報告要旨]郭嵩燾（1818-1891）は、道光から光緒期にかけ、幕友、地方大官、郷紳、そして初代駐英公使を歴任したユニークな士大夫である。彼の思想を貫く特徴は、強烈な士大夫意識と開明的な西洋認識であるが、本報告ではその両者の形成に重要な役割を果たした要因として、咸豊期湘軍での彼の軍事費対策に注目する。郭は、咸豊四年（1854）曾国藩から軍事費獲得を担うべき大員として推挙されて以来、生涯を通じ各地で捐輸や釐金に取り組んだ。本報告の主要な問いは、第一に、当時士大夫の腐敗を問題視していた郭が、一方で捐輸や釐金という「利」に関わる事業に携わらねばならなかった自己を、どう正当化したかということである。第二に、軍事費対策と西洋体験の関係である。郭の西洋体験は、咸豊六年（1856）上海で軍事費対策の一環として西洋人と接触したことに始まる。この体験は、西洋との通商を活用した商業立国という、郭後年の主張につながっていく。

[報告者紹介]小野泰教（おの・やすのり）氏は1981年生。専攻は中国近代思想史。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。日本学術振興会特別研究員DC2。主要論文に「郭嵩燾・劉錫鴻の士大夫観とイギリス政治像」（『中国哲学研究』22、2007年）、「陳宝箴と黄遵憲の官僚制観——湖南変法運動の諸相」（『中国哲学研究』24、2009年）などがある。

◇ 「夷務」をつかさどるということ——18世紀中葉の広州における貿易制度の構築と貢品制度との関わりについて

藤原 敬士

[報告要旨]近年清代の「朝貢」や「互市」に関する新しい研究が次々と公表されているが、これは清朝の対外政策の本質を改めて問うことに極めて高い関心が寄せられていることの証左であるといえる。本報告ではこの問題に対し、貢品という制度をキーワードとしてアプローチしようとするものである。貢品制度とは全国の名産品を皇帝に献上する制度であり、広州で貿易を管理していた両広総督および粵海関監督も年々紫檀や瑠璃の工芸品を献上していた。しかし乾隆帝が乾隆20年前後に西洋人が持ち込む舶来の時計や宝石などを優先的に集めるようにとの命令を発したのに伴い、総督は舶来品を確実に入手するために西洋人の受け入れ制度を改変してゆく必要に迫られるのである。こうした事例の検討を通じて、報告では広州の官僚が貿易を管理する、すなわち「夷務」をつかさどることの意味を明らかにし、ひいては清朝（乾隆帝）にとっての広州貿易の価値や意義に論及する。

[報告者紹介]藤原敬士（ふじわら けいじ）氏は東京大学大学院総合文化研究科博士課程に在籍し、清朝史を専攻。アヘン戦争前の広州における貿易について研究し、主要な論文には「18世紀中葉の広州における行外商人の貿易参入に関する布告の分析」（『東洋学報』第91巻第3号、2009年）がある。

シンポジウム

中国史上におけるイデオロギーの役割

7月11日（日）10:00～16:30 一番大教室

企画の趣旨

ある国家の政治的・社会的な統合には、イデオロギーがつきものである。中国の場合も、二千年前の統一王朝誕生以来、思想・理念が作用してきた。その意義を歴史的に整理することは、中国がアメリカと並ぶ大国として現代世界に大きな存在感を示している現在、あらためて重要になってきている。

このシンポジウムでは、5人の報告者の発表をもとに、中国の政治を動かしてきたイデオロギーの役割について、古代から現代にいたるまでを俯瞰して考察し、議論を深めていく。

シンポジウム セッション1 大一統のイデオロギーとしての儒教

報告1 「古典中国」の形成と王莽

渡邊 義浩（大東文化大学）

「古典中国」と呼ぶべき理想的国家モデルの形成に大きな役割を果たした王莽の新は、わずか十五年で滅びた。それにも拘らず、新を滅ぼした後漢は、王莽の「古典中国」を継承し、儒教の経義によって整備を続けた。その結果、「古典中国」は、儒教の経義より導き出された統治制度・支配の正統性・世界観を持つに至った。

「古典中国」の統治制度は「大一統」を原則とし、それを保つ手段としては、「郡県」と「封建」が対照的に語られる。「大一統」の障害となる私的な土地の集積に対しては、「井田」の理想を準備し、あらゆる価値基準を国家のもとに収斂するために、「学校」が置かれる。また、「古典中国」の支配の正統性は、「天子」という称号に象徴される。中国の君主は、漢代以降、天子と皇帝という二つの称号を持ち続ける。さらに、現実に中国を脅かす異民族を包含する世界観として、華夷思想を持つのである。

本報告は、王莽が形成し、後漢「儒教国家」が確立した「古典中国」というモデルの具体像を提示し、その形成過程を論じることにより、王莽の果たした役割を明らかにするものである。

唐が衰亡したあとの混乱期を経て、宋がふたたび中国を統一したとされる。しかし、北方の遼との並立あるいは軍事的劣勢は、宋代の士大夫たちに強く意識されざるをえない事態だった。南宋ともなると、かつての中原の地を金に奪われて南方に逼塞するにいたる。

このように、宋は現実には「大一統」をなしとげていないにもかかわらず、これを夏殷周三代に並ぶ「盛世」として自画自賛する動きが生まれる。そのなかで最も成功を収めたのが朱子学であり、中華文化の精髓である儒教を純化・復興するために孔孟の精神に帰ることを標榜し、後漢以来の経学を批判して「古典中国」モデルに代わる別様の思想体系を樹立した。元代を経て、明においてこの新たな体系が王朝体制を支える理念として確立する。

本報告は、経学の組み替えに注目することで、朱子学がどのような問題意識に立って「古典中国」モデルを乗り越えようとしたかを探り、以後の政治秩序に及ぼした影響に言及してみる。

シンポジウム セッション2 近現代の革命イデオロギーと大衆

報告3 中国革命のイデオロギーは人間の安全保障を準備したのか？

緒形 康 (神戸大学)

1958年に始まる人民公社運動の中で提起された「プロレタリア独裁下の継続革命論」は、特権的な党幹部と大衆の間に横たわる差別（資産階級法権）の撤廃を強く訴え、社会主義社会における革命の継続を主張するものだった。1981年の「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」は、この考えを毛沢東の個人的過ちであると批判し、その意義を全否定している。しかし、1976年の四五運動から連綿と続く現代中国の民主化運動を、そうした人間解放とユートピア建設の精神とは無縁のものだと捉えることは、果たして妥当であろうか。毛沢東時代の美学問題大討論、形象思惟討論から、改革開放期の真理基準論争、人道主義・疎外論争、人文精神討論、自由主義と新左派論争に至るまで、主体性と自由、正義と公正をめぐる20世紀中国の考察は、中国革命のイデオロギーからのたんなる脱却過程の産物に過ぎないのだろうか。すでに指摘されているように、2003年の孫志剛事件を契機に生まれた維権運動は、人間解放とユートピア建設に関わる現代中国の省察を、新しい段階へと飛躍させている。維権運動が提起した人間の安全保障をめぐる新しい理念を、中国革命のイデオロギーと対比することから、問題の糸口を探ってみたい。

報告4 革命イデオロギーの遠い水源——清末の「救劫」思想をめぐって——

山田 賢 (千葉大学)

本報告は、革命イデオロギーそのものについてではなく、そこから時間軸においても、そして一見すると論理においても遠く離れた地点からの語りとなる。清末の地方社会では、時に熱狂的な、とでも形容すべき「善」への同調が間歇的に発生した。それはたとえば慈善行為への献身的貢献だけではなく、善行と感じられた行為を賛嘆する輿論、善を体現していると見なされた民間宗教カリスマへの帰依、善の指針を得るために流行した扶乩結社の活動など、幅広い現象を内実として含むものである。

こうした「善」への意志の背景には、人間の為してきた積悪ゆえに世界は破滅的な危機（「劫」）に瀕しており、これを挽回するためには、人々が善行に邁進して清浄なる善気を発し、これによって世界を浄化していくしかない、という「救劫」の世界観が存在していた。この「救劫」の世界観、そして「救劫」の世界観に基づいて現れた民間宗教や扶乩結社などは、中華民国の時代に入ると、古い、立ち遅れたものとして痛撃されることになるだろう。ここで水脈はいったん途絶えたように見える。しかしそれは伏流として革命イデオロギーのおおきな流れのなかに繋がっていくのではないか、というのが本報告準備段階における「予感」である。

ひとまず清末社会における「救劫」思想について考察しつつ、そのゆくえについて思いをめぐらせてみたい。

報告5 毛沢東時代における大衆動員と革命イデオロギー

金野 純 (学習院女子大学)

大衆動員による社会変革には、国家の組織的なインフラはもとより、分散した個人を統合するための強力なシンボル、変革を正当化するイデオロギーが要求される。かならずしも明確な見返りが約束されない勤労奉仕に住民を動員するには、上からの強制だけではなく、人びとの内部から作用する特有の影響力が効果を発揮する。毛沢東のカリスマや革命イデオロギーは、こうした大衆動員期に大きな力を発揮したように思われる。

毛沢東は革命成功後もなお階級闘争の必要性を強調し続けたが、特に人びとの「イデオロギーの領域」にその必要性を見出していた。「階級闘争は特にイデオロギーの領域に表現される」と指摘しているように、大衆動員期には人びとの思想にまで踏み込んだ運動が度々おこなわれた。このような個人々の「イデオロギーの革命化」は、最終的に60年代の文化大革命へと繋がっていくのである。

すなわち、現代中国におけるイデオロギーの問題を考察する際には、単に政治エリートのを分析するだけでは不十分であり、むしろ喧伝される革命イデオロギーが社会でどのように受容されたのかというのが大きな問題として浮かびあがる。本報告では、毛沢東時代の大衆動員を系譜的に検討しながら、社会末端の政治運動において革命イデオロギーがどのような機能を果たしていたのか、また人びとはそれをどのように受容したのかについて、文化大革命までを視野に入れながら検証したい。

◆シンポジウム報告者紹介◆

◇ 渡邊 義浩 (わたなべ よしひろ)

1962年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了。文学博士。北海道教育大学講師・助教授を経て、2004年より大東文化大学文学部中国文学科教授（現在は中国学科）。中国古代史専攻。中国の王権と思想との関係を研究課題とする。『後漢国家の支配と儒教』（雄山閣、1995年）、『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院、2004年）、『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、2009年）等。

◇ 小島 毅 (こじま つよし)

1962年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。東京大学東洋文化研究所助手、徳島大学総合科学部助教授を経て、1996年より東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在は准教授）。中国思想史専攻。東アジアの王権論を研究課題とする。『宋学の形成と展開』（創文社、1999年）・『東アジアの儒教と礼』（山川出版社、2004年）等。

◇ 緒形 康 (おがた やすし)

1959年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。文学博士。東京大学文学部助手、愛知大学法学部講師、同助教授、同現代中国学部教授、神戸大学文学部助教授、同教授を経て、現在、神戸大学大学院人文学研究科副研究科長・教授。中国近代思想史専攻。20世紀東アジアの思想文化史を研究課題とする。『危機のディスクール——中国革命 1926～1929』（新評論、1995年）、『一九三〇年代と接触空間——アジアディアスポラの思想と文学』（編著、双文社出版、2008年）等。

◇ 山田 賢 (やまだ まさる)

1960年生まれ。名古屋大学文学研究科博士後期課程修了。北海道大学文学部助手を経て、現在千葉大学文学部教授。専門は中国清代社会史。主要業績は、『移住民の秩序』（名古屋大学出版会、1995年）、『中国の秘密結社』（講談社、1998年）、「地方社会と宗教反乱—18世紀中国の光と影」（岸本美緒編『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998年）、「記憶される「地域」——丁治棠『仕隠齋涉筆』の世界——」（『東洋史研究』62巻2号、2003年）、「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」（『日本思想文化研究』第2巻第2号、2009年）、「「宗族」から「民族」へ——近代中国における「国民国家」と忠誠のゆくえ——」（久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』有志舎、2010年）など。

◇ 金野 純 (こんの じゅん)

1975年生まれ。一橋大学大学院博士後期課程修了。博士（社会学）。日本学術振興会特別研究員を経て現在学習院女子大学専任講師。専門領域は地域研究（中国）、歴史社会学。主要業績は、『中国社会と大衆動員：毛沢東時代の政治権力と民衆』（単著、御茶の水書房、2008年）、『文革：南京大学14人の証言』（共編・共訳・解説、築地書館、2009年）など。